

三河 アララギ

2024年 令和6年6月 水無月
みなづき

六 月 号

第七十一卷 第六号



ニューヨーク日記(212) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

SEA TURTLE NESTING SEASON

Blue Shoe Diaries



今シーズン初の海亀の巣です。これから沢山みれるといいな。今年こそ卵から孵って海に向かっていく姿見れるかな？ このシーズンもあってこの天気はもうまるで夏で日も長くなりました。ビーチ散歩も日の出近くに起きなくては暑くなりすぎてきました。あと蚊も出てくるんだろうな。蚊よけ買っとかななくては！ 少なくとも、今年出現している無数のセミではないからよかったかな？

It looks like it's sea turtle nesting season again. This is the first nest I saw this year, and I'm hoping to see lots more! And maybe this year, I will be lucky enough to see the babies return to the sea. Keeping my fingers crossed! With this, the weather is getting very summery and the days are longer. I need to start waking up earlier, closer to sunrise, to walk on the beach. It also means the mosquitos are back. At least they are not the gazillion cicadas that are emerging this year?

目次

第七十一卷第六号(通卷八四六号)

表紙・面になった動物達 (1)

ニューヨーク日記(212) Blue Stone(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々」 今泉 米子(5)

三河アララギ歌集VII 大須賀寿恵(6)

三河アララギ歌集IV 夏目 勝弘(7)

『歌集 八千代』 岡本八千代(8)

三河アララギ歌集VI 弓谷 久子(10)

紫草 今泉 由利(12)

十葉の香 安藤 和代(14)

平穏 山口千恵子(16)

御衣黄桜 杉浦恵美子(18)

流れる景色 伊藤 忠男(20)

庭中改修(その四) 白井 信昭(22)

大好き 矢崎 直人(24)

『ことよせ』 いーはとぶ

水野 絹子(26)

牧原 規恵(26)

稲吉 友江(27)

鈴木美耶子(27)

歌集 正枝(28)

森 厚子(28)

大武 智子(29)

現代学生百人一首 東洋大学

中山渚々夏(30)

花輪ひなの(30)

春木 翔伍(30)

永井 滉子(30)

井上 愛心(31)

門田 七架(31)

丸山 賢人(31)

前田 智花(31)

植村 公女(32)

木村 歩歩(32)

今泉 如雲(32)

矢崎 直人(33)

今泉 由利(33)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(34)

折々の詩(四) ふじのけんじ(36)

五感を澄ませば(24) 杉浦恵美子(38)

附録(二十四) 矢崎 直人(40)

『立夏』 中屋 保之(42)

『酔いの徒然』(146) 丸山酔宵子(44)

『風車の歌』 高橋 育郎(46)

絹の話(163) 今泉 雅勝(48)

『江上浩二の独り言』 江上 浩二(50)

初狩便り31 花野みぷり(52)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

康鍼治療院 本田 勇氣(54)

『岩手吟行 其の一』 玄翁 (56)

『三河アララギ発祥』 殿山 木風(58)

『三河アララギ』について 今泉 由利(60)

(62)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

起きいでていまだ暗けれ午前五時はだけし寝間着の前かき合はす
裏庭のこほろぎと飼ふすずむしと聲のあひだにわがねむりあり

御津山の椎の木ぬれに屯してあそべる五位にゆきかへりなし

明日は明日はといひつづけつつ明日のなきつひの一日に到るなるべし

朱の花極まりゆきてこんにやくの実みのりし梗のやや傾けり

天下泰亂たいらんと叫びをあげて新らしき主義の國家をまた固めゆく

かくれみの柊ともに老いぬればその葉まどかになりゆくといふを

海屋の山田公雪せつあんひ冤碑の拓法帖つひにわが掌にのせて披くか

無料化に毎日来る老もあり遠慮して遠く来る老もある

今朝の患者のはやき幾人平均のよはひは八十歳を超えてゐるべし

歌集 「草々」

今泉米子

轉害門てんがいもんの高き石壇におろすわが背に佐保路を直ぐに来る風

十三重の石塔そびゆメヒシバの穂に出でてそよぐ境内にして

木戸閉ざし曝れて文字なき立札に北山十八間戸しづまりてをり

木戸開けてもらひ入りゆく十八間戸白砂の庭に人の跡なき

み佛をまつりし跡か東北の端なる一間やや廣くして

木の下によせて崩るる石佛しばし言絶えて老いわが二人

注射器を一つ小さく描き添へてあこちやんはびやうきがすみました

くれなゐの花小さくなりしハイビスカス青南集をしまひなくしぬ

五六匹まだ翅白き鈴蟲に添へてくれたる秋茄子を焼く

ちちははのみ墓の花と今朝は剪る秋にしげれる青き黄素馨

三河アララギ歌集Ⅶ

しじみ蝶

大須賀寿恵

もくろみは布団を干さむことなれどわくわくとして早く起きたり

じめじめと鉄平石に雨ふりて翹たたみをりしじみ蝶ひとつ

鍋の湯にをどりつつゐて鳴門わかめみるみる緑にふくらみてゆく

浅漬の胡瓜かみつつ奥の菌の健やかなるを吾はたのしむ

水運び来たれる如雨露に入れて帰るけさ収穫の曲れる胡瓜

樋つたふ雨だれの音は一分ばかりひでり続きの雨通りすぐ

竹の杖つきて護岸の階くだるわれに鴨らの翔び立ちにけり

よたよたと川敷歩みてかいつぶりの六羽は次々に流れに入りゆく

ゆゑなき涙湧きくる朝なり炎をあげて紙屑を燃す

松葉画廊に友の花の画を観にゆかむ幾年振りに草履をはきて

三河アララギ歌集IV 風

夏目勝弘

海よりの風の抜けゆく待合室にたびたる煤竹を提げて立ちゐる

生垣をくぐり吹きくる西風に真白き紙の舞ひ上りゆく

庭の土に漁れるチャボの黒き羽根息する風に逆立ち光る

俯きて歩むは悲しみ持つならず帽子を飛ばす西風の中

上向けば常にごうごうと唸りゐる我に聞こゆる宇宙の響き

西側の窓をただ見て坐りをりガラス戸鳴らす風の過ぎたり

庭抜くる風にころがる音などに段ボール箱またアルミの空缶

暗闇の一つの方を見つめぬつ頬に空気の流れを感ず

家に沿ひ吹きくる風の強弱に波うつ十葉の花の群落

クモの糸に吊るされてゐる珊瑚樹の青き落葉のキリキリ廻る

『歌集 八千代』 ピアニカ 蒲郡 岡本八千代

あすよりは奥の細道を教へむと分厚き指導書を持ち帰るなり

「奥の細道」を暗誦してゐる生徒らの声たどたと廊下にきこゆ

愛教組婦人部の綴は半年を未だ経ざるに分厚くなりぬ

弾圧処分受くるかもしれぬ「秘」の書類わが婦人部の綴に加へぬ

第八次賃金闘争の集金を決めたるのみに夜になりたり

ストも出来ぬ腰抜教員組合とののしられつつ今年も全体集会を持つ

削除すべき箇条いくつに惑ひつつ第八次賃金闘争の議事進みゆく

光にぶき電灯ともれる栄小学校に移りてよりストの崩れてしまひぬ

愛教組拡大闘争委員会の長引きて王山荘を出でねばならず

仏教の五色の幕をめぐらせる日泰寺にて討論はじむ

三河アララギ歌集VI 日照雨 豊川 弓 谷 久 子

東の間を日照雨の止みて地上より空にたちたり初冬の虹

今朝走るオリエント急行見むとして芒の土手に立ちて待ちをり

陳列台の上に飾りぬ銀色のハイヒール胸に編み込みしセーター

舞ひ落つる枯葉の如く蝶の来て我が干す蒲団に翹休めたり

鰻など買はむと師走の町に出づ夫が戴きたる義援金もちて

廃船の傾きて砂に埋もれたり西方浜には人誰も居ず

カリカリと夫の手に今日音立つる最上川よりの胡桃の実二つ

もの蔭に雪残る日に万作の花の枝持つ人に逢ひたり

足弱く病みるませるかホトトギス冬ざれてなほ咲き続く庭

田に沿へる用水路ここより曲りゐて一きは高しせせらぎの音

貝津丸山の我の畠は芽花の穂白き炎の如く風に靡ける

洗濯機停めたる余韻の絶ゆるまで流れる白き雲を見てをり

背のびして伸びたつ梅の枝を切る梅雨の晴間の空は明るし

柿の実のころがる路地は風の道老い猫一匹眠りてをりぬ

我が掌より幼なの小さき掌の上に移したり蛍の青き光を

紫 草

東京 今 泉 由 利

紫草の生え立つ鉢をひっくり返し泥んこ根っこを教えたまう文明先生

根っこより紫色を染むること笹腋に一輪づつの白い花

紫草の生ふる標野に幾代を継ぎこしことよ今を失う

古来紫根エキスの薬効は利尿解熱切傷火傷

絶滅は近くしならむ紫草憧れ深く我身に仕舞ふ

白い花七つ八つ咲きにけり紫草に白い花咲く

気兼ねなく分厚い本にのめり込む天気予報は嵐とぞ

石も木もほろびすたれて過去となり過去を探して今日の雨の日
もともとは何も無かったと宇宙そんな説も無かったかも

父と母との大切は私の大切イチイ科イチイ属アララギ親し

アララギのその実は熟し赤くあり種子には毒をタキシシン含む

アララギの木下に寄りて背のびして赤実を摘む食みにしことも

イチイ科イチイ属雌雄異株常緑高木葉は線形実は透き通る赤

イチイ木ぼくに別名あり、アララギ、オンコ、キャラボク、サクノキ

アララギの木材にして伽羅木の香る仁徳天皇の正一位笏となり

十葉の香

豊川 安藤 和代

朝の窓小さく聞こゆ花火の音今日はいづこの祭礼なるや

昨日抜きし十葉の香の残る手を気にしつつ朝の汁の実刻む

無造作に窓辺に活けしチューリップ今朝は豊に形整う

喜びも悲しみも人それぞれの色ありてムスカリ光る瑠璃色

細やかに三日も続く春の雨昨日見ぬ草庭に芽を出す

「シヤブシヤブ庵」若者多き客の中混りて吾れはおなかいっぱい

冬の間の水路も日毎春めきて小さき流れに大きき輝き

アスパラを絵手紙に描けば太過ぎと孫笑えども何か幸せ

幼等は半袖で遊ぶ公園に冬セーターで友と語りぬ

数独の解ぬひと日は消しゴムもペンも疲れて日脚伸びゆく

野を行けばつくつく土筆のパレードだひばりも応援深みゆく春

「高齢者」を「幸齢者」と書く人のいて満足まんぞく桜満開

初蝶は「私を見て！」と言う様に若葉にそまり優雅に去りゆく

春風におしゃれ心を撥られ紅ひく吾れを鏡が笑う

亡き息子偲べば悲し夜の雨最終列車のかすかなる音

平 穩

豊川 山口千恵子

一日降る冷たき春の細き雨昼も灯れる露地の街灯

切りとりし沈丁花の香りつつ一日続ける三月の雨

隣人は介護施設にはや一年無人の家に春の日あまねし

五寸ほど伸びたる麦の青き畝を光らせ吹き過ぐ三月の風

シクラメンの小鉢を出窓に一つ置く心楽しく紅の花

紅の花弱よは咲けるさくら草一つの鉢に二株植ゑたり

門口に吹き寄るモチの春の落葉朝々掃き取る塵取一杯

わが髪の豊かなりと言はれたりを良くしつつ美容室出づる

貰ひたる瑞々青き春キャベツ朝の厨にざくざく刻む

洗濯物風にゆらゆら揺るる庭何事もなく平穩続け

温かき春の光の中に干す洗ひざらしの作業ズボン

新しくカーテン替へて住めるへや雛子は慣れて二年の過ぐ

一人住む雛子と来たるスーパーに春の海よりのあおさのり買ふ

かさみたる医療費ノートに書き写し確定申告せむと電卓を押す

収入ははつかばかりのわが家なり医療費控除の申告書かく

御衣黄桜

蒲郡 杉浦恵美子

満開を五日も過ぎて訪ひにけり我等の花見の秘密の基地を

あれは何薄緑色が花盛り葉桜並木の中にひともと

ああこれは御衣黄桜ね今までは染井吉野の蔭に潜みし

五日間遅れたお蔭か御衣黄の満開に合ふ我等の僥倖

御衣黄の花の下にて脚伸ばし風に吹かるる今年の出合ひ

お互ひに語らずともよし御衣黄の淡き緑の高貴を愛でり

満開の御衣黄の下安らへば小川の蛙が間なしに鳴いてる

昼下がり里の平和な小川べり切り上げ時を互ひに言へぬ

群生のミツバツツジがこの近く序に見ようか漸く腰上ぐ

新装の中日ビルに入りてみる閉館以来五年の月日

地下街を入りし先には味噌煮込み饅頭屋ありき今はもうない

夫は一半頼みてその上我が分も食べて仕舞ひぬ味噌煮込み饅頭

この辺り小さな洗濯取次店ありき店主は山口の人

独り身の店主と夫は馬が合ひ街の情報仕入れて来たりき

店たたみ今ごろ何処の空の下かく言ふ我もこの街には居ぬ

流れる景色

大阪 伊藤忠男

見渡せば人ひと人があちこちら朝を迎えたばかりなりとて

カラフルなシャツにブラウス花柄も新大阪の風物詩なり

何処に行くスーツケースも色豊か旅の心に満ち溢れたり

日帰りの出張少し辛き歳息を切らして階段上がる

カバン持ちシャツにスーツにネクタイを締めてガラスに我れ映りおり

出発の迫る「のぞみ」に身を置いて頭によぎる会議の行方

半睡の時間が流れて三河路をいつの間にもやら通り過ぎたり

ただ景色流れ過ぎるや窓の外記憶残らず右から左

日帰りの出張帰り大阪に向かう車窓はモノクロなりや

小雨降る鴨川沿いに桜散る水面は今が満開なりや

休み明け荒れた天氣に憂鬱も増すばかりなり重き足取り

風で傘させず駅まで走り行く濡れた背広に心も湿る

憂鬱な気持ち研ぎ干す青い空どこにいるのかひばり鳴く声

時流れ気兼ねなくして酌み交わす5年の月日取り戻したり

同窓の友か集いて笑顔ありやっと戻りきあの時の時

庭中改修(その四)

豊川 白井 信昭

またしても庭中花壇掘り出しして豆板支柱使うもくろみ

生垣の奥下段^{どこ}処改めて小さき花壇造らむとする

三本の支柱外側あてがえる豆板一枚巾一八〇センチ

水はけの受台三か所下段にて豆板一枚コンクリに固定

中ほどの柱両側下段面小石つめ入れ土を入れゆく

取り置きの水仙あまた球根などようやくやくにして植え戻しけり

改修の成りし^{あかとき}暁一本の椿を妻は植えたしと言う

角口のモッコウバラより囀さえずりが聞こえるよう静かな朝あした

お堂の解体切り崩す職人の振動ドリル響き来る音

地境にシート張り掛け粉ぼこり舞いし竿に今し取り込む

地境に空き地挟む小屋今宵よりLED点灯明るかりけり

小屋の前ブロック塀ありて横の道出入口開け段差なくなる

フェンス越し駐車場出来て乗用車一台止めるに十分な広さ

ここもはや駐車場なせり乗用車一台止めるに十分な広さ

今の月を従兄弟の良興さん持ちくれし「不知火」相楽よりのもの

大好き

埼玉 矢崎 直人

いま僕が自分自身で誇れるは十年投句続ける俳句

三十代十年かけてみがかれた自分で四十路の自分を生きる

あと少しあともう少し深く観て俳句の稿はおさまりてゆく

過去よりもいまを一番良い時にしたいと思ふ時に時々

それぞれが思ひをかかえ働ける職場にあつて働けること

「風港」に「庭」に石川惜しまれつなくなる俳誌に送れる人よ

終刊の雑誌に投句されし人俳句や短歌ゆき場所あるか

根津になく表参道最寄り駅竹の迎える根津美術館

燕子花尾形光琳金屏風上方威光国宝鑑賞

鹿威庭園歩き杜若二本三本青き花揺れ

川と道通ぜぬことのでつくられた思想とその生み出す文化

飛鳥山紫花菜迎えられ線路つたいに咲いてゐにけり

再会の声の飛び交ふ日比谷の地映画完成上映会で

奈緒ちゃんの生きてきた時撮る映画ドキュメンタリーにいのちが残る

大好きを三つ数える生きてきたそして生きてく時を重ねて

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

明けやらぬ五時のコンビニ店員は雨も思ひ出良き旅行をと

水野 絹子

首都高を走るあなたの横顔を撮らむとすれば皇居の過ぎゆく
朝餉とる香取のホテルの老夫婦物言はぬまま我らに似たるや

寝ぼけ眼で立ち寄ったコンビニでかけられた一言が心に残り、短歌にしてみました。

わが夫の記念桜の春日山固き蕾はほころび始む

牧原 規恵

春を待つわれの気持とうらはらに窓の外には激しき風雨

卒寿になる友のわが家に訪れるこの一時をかみしめてをり

春に向かい心まで暖かくなるような気がします。生活面でもいろいろ変化のある日々が続きます。

遊ぶ子を久しく見掛けぬ公園にぶらんこ漕ぐ子を今日は見てゐる
稲吉友江

友くれし桜の枝の数本の蕾は固し又眺めをり

美容院に飾られるたる白椿哀れ無垢さよその気高さよ

少子化ゆえか諸事情が最近は公園で遊ぶ子が少なくなりました。子供の弾む声は元気を貰えるものです。

太々と二十五絃箏響きくるゆくりゆくりと源氏の語り

鈴木美耶子

箏の奏でいよよ高鳴り須磨の帖語られてゆく源氏の思ひ

朗読会源氏のままに出づれば雨日照りの雨は虹を立たせり

源氏物語の語りを聴く機会がありました。時あたかも光る君への放映中。しばし千年の昔へ誘われています。

春なれば小女子いただく何十年「まーちゃん食べるか」あの声はもう 牧原正枝

パッチ網三艘組みて操業と船を渡りて君は指示せし

その昔「えびす講」には夜更けまで漁師の声のあふれし隣

時季の魚を頂いていた元漁師の方が突然なくなられ昔を話せる人が減っていくさみしさを感じます。

石三つ置きたるだけの坪庭に雀戯れ花咲初むる

森 厚子

燕たちもう来たよと夫の言ふ三羽もとききて吾きき返す

手を入れし鳥羽水族館の小さき池吸ひ寄りてくるドクターフィッシュよ

燕が渡ってきました。巢には一羽か二羽でなく三羽!?思わず聞き返しました。若き兄弟なのかしらと。

車窓には麦畑青く続きゐて伊勢の国なり肥沃なる土地

大武智子

翳しくるる阿弥陀如来の面のまへ無心に掌合はせて祈る

當麻寺中将姫の練り供養三河の国よりはるばる来る

毎年四月十四日の當麻寺のお練り供養。ずっと念願だったが、今年杲気なく果たせた。

現代学生百人一首

東洋大学

暗い道街灯の明かり道しるべ私もなりたい誰かの明かりに

近畿大学附属高等学校2年 中山 渚々夏

反抗期来たら何する母が問う少し考え「野菜を残す」

伊丹市立松崎中学校3年 花輪 ひなの

コロナ禍で大声出せずヒソヒソとしゃべる姿は小鳥のようだ

東洋大学附属姫路高等学校1年 春木 翔伍

視線落ち口にはマスク会話なく耳にはイヤホンまるで三猿

西宮市立西宮東高等学校1年 永井 滉子

二年半育てた髪がカツラへと姿を変えて闘う君へ

山陽学園高等学校3年 井上 愛心

音楽部最後の舞台コンクール緊張の先に見慣れた笑顔

福山市立松永中学校3年 門田 七架

パソコンと話し始めてはや一年カメラで人の目見るクセつける

阿南工業高等専門学校5年 丸山 賢人

蝉時雨ポニーテールのうなじ灼くコーラの瓶当て涼む午後二時

聖和女子学院高等学校1年 前田 智花

『俳句』

旅果てのこぼしてをりぬ春の泥

植村公女

交差点の真中で止まり春三日月

花の冷え地図を広げて過ぎゆけり

菜の花や昨夜ゆうべの嵐ものとせず

木村歩歩

菜の花や崩れる土手の春支え

三陸の単線は一両の春

いくつもの健診めぐる春ツアー

蒲公英やベビーカー押すふくらはぎ

八重桜の名に右近も松月も

今泉如雲

薩摩からの子も新入生名簿

九十二歳の女将や花見茶屋

谷下りて躑躅の根津の美術館

矢崎直人

燕子花尾形光琳金屏風

再会の声の飛び交ふ穀雨かな

暮の春生きて来し時撮る映画

大好きを三つ数える夏近し

左でも右でもなくして夏に向く

今泉由利

神の世を今に繋ぐる白辛夷

直ぐ立つる葱の坊主の花姿

アララギをおんこと呼べり正一位

モクセイ科ナンジャモンジャの線状花

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

花萼を踏まじとあるく地藏道

木風

桜咲き西にかすかに富士の山

湯けむりの芽吹く黄色のやさしさや

春風や英傑のうた奥州路

春の味冬をしのんで新酒かな

雄山

ワンオンは花のじゅうたん一直線

桜散る雪か霜か球はどこ

葉桜にわびしくなりぬ屋形船

紀山

春がすみ時にきこゆわさびよござつしよ

篤風

父の日もカアカアと鳴くカラスかな

金子

花ぐもり金色堂に吟ひびく

恵風

春吟行笑顔でめぐる童話村

吟旅の偉人を巡る春の風

吟じては深まる友好春宴

とみ枝

折々の詩(四)

ふじのけんじ

燃える朝

闇の中から 地平線が現れる
ばらばらに向いていた 空気の粒が
一つの方角に向き始める

単色の世界に 色が入りはじめる

その瞬間 空が燃える

朱色になった 空気の躍動が

白くなった ころのキャンバスを
染めていく

冷たい世界に 光が差し

気がつけば 何かに包まれていた

白く 止まっていた時間が

また 動き出した

帰ろう 私たちの家に

帰ろう 私たち自身に

炎はすべてを

やさしく包んでいく

五感を澄ませば (24)

杉浦恵美子

利休草

用事の時刻までに余裕があったので馴染みの喫茶店に久しぶりに顔を出しました。

街中なれど、カウンターだけの、店主が一人で切り盛りする、十席あるかないかの小さなお店です。

ちようど三人の先客が帰られるところで、急に静かになった店内を見回すと、柱の花活けの利休草に目が止まりました。

潔く一種類だけ。それを見ただけで嬉しくなりました。

利休草―花と云うより先の小さな葉っぱの動きが楽しい大好きな植物です。

また名前の由来ははっきりしないものの、茶花として使われるようになったことからとも言われ、名前まで慕わしく思われます。

「さて、今日は何を頂こうかな」

店主はわたしの様子を見て的確なアドバイスをしてく

れます。

この日は、やや薄めのストレートティーを勧めてくれました。

ゆつくり紅茶をいただきながら、お互いの体調などを報告し合っていると

「この健康不安はわたしだけが抱えているわけじゃないんだ」

と気が晴れて、相手のことを気遣う余裕が生じてくる気がします。

やがて、次のお客がご来店。

話を聞いていると、どうやら店主の同級生。

この方はぜんざいをご注文。男性が美味しそうに召し上がっているのが珍しくてつい声をかけました。

「甘党ですか」

それをきっかけに四方山話が始まりました。

数年前に会社を定年退職し、家業の蜜柑栽培を本格的に継いだこと。今までは殆ど関わって来なかったため一から勉強中で、一番体力がいるのは消毒作業。繁忙期にはプーターローの娘が事務的な仕事を請け負ってくれること等々。プーターローと言いつつもその呼び方には慈愛が

感じられました。

話題はいつしか今が旬の樹熟デコポンに。

J Aのスーパーに行くと贈答用の化粧箱入りが山積み。

何しろ一玉千円近くもするので、見向きもしませんでした。最近どんな味なんだろうと恐る恐る一個求めてみました。

さすがに完熟まで木にぶら下がっていたものなので甘みが凝縮されていて薄皮が全然気にならないほど薄いのです。

美味しいことは美味しいですが、蜜柑界のメロンの存在。いわゆる「炬燵に蜜柑」とは対極にある感じ。

蜜柑農家さんにそのことを聞いてみました。

「ああいう蒲郡ブランドの蜜柑は、主に若い蜜柑農家に魅力ある蜜柑作りをさせるため農協が指導に力を入れている」と。

たしかに、温州、青島など普通の蜜柑のシーズンはとつくに終わっているのに、店頭には色んな名前の柑橘類が並んでいます。

はるみ、はるか、せとか、清見、なつみ、セミノール、

スイートスプリング等々。

何だか女の子の名前の羅列のようで、命名者の苦心がしのべれます。

ところで蒲郡蜜柑の代表と言えば、箱入娘。

そのネーミングにはいかに大切に育てた蜜柑であるかということが表れています。

因みに糖度12度、酸度1・2%以下で園地で収穫されたうち外観などの厳しい基準を満たしたのみその名を称してよいのだとか。ありがたや。

その二級品のおてんば娘というネーミングも傑作。

実は、今まで柑橘類はあまり好きではなかったのですが、蜜柑農家さんとの四方山話で蜜柑の奥深さを知って、各種試してみたくまりました。

利休草その名ならずともその姿その名なればこそさらに慕はし

附録（二十四）

矢崎直人

谷下りて躑躅の根津の美術館

根津美術館にて《国宝・燕子花図屏風 尾形光琳筆》（日本 江戸時代 十八世紀 根津美術館蔵）を鑑賞しました。根津美術館の庭で植えられているカキツバタが咲く頃に合わせて展示されるということでした。根津とつきますが、最寄り駅は地下鉄東京メトロの表参道駅から徒歩八分。「春暑し」という季語がぴったりの気候で、国内外の観光客で駅周辺から賑わっていました。何度か訪れたことがありますが、入り口の竹がいつみても趣深い風景です。

燕子花尾形光琳金屏風上方威光国宝鑑賞

鹿威庭園歩き杜若二本三本青き花揺れ

大好きを三つ数える夏近し

日比谷図書文化館にて、伊勢真一監督の『奈緒ちゃん』（98分／1995年）と『大好き〜奈緒ちゃんとお母さ

んの50年〜』（110分／2024年）の映画を鑑賞しました。《奈緒ちゃんシリーズ》の最新作、第五作目の完成上映会でした。

奈緒さんは、重いてんかんと知的障がいを持つ女性で、伊勢監督のお姉さん西村信子さんの娘さん。五十歳を迎えました。医者から長くは生きられないと言われましたが、お母さんとお父さん、弟さん、奈緒さんを中心に集まった仲間、そして地域の方々の支えがあつて元気に過ごされています。

伊勢監督の映画は、二回、三回と観るたびに新しいことを感じる映画です。ヒューマンドキュメンタリーと言われますが、映画を通じて奈緒さんの人生を観ているうちに私自身のことや家族のことを考えます。そして、世の中のこと社会のことが映し出されて、いま一度振り返る機会を得られます。上映後、監督がどのような思いで映画を撮ったのか、会場でその日に鑑賞した時間を共有しながらトークをされるのを聴くのも楽しみです。

最新作『大好き』は、奈緒さんとお母さんの五十年を振り返る映画です。皆さんの大好きが詰まった映画です。

奈緒ちゃんの生きてきた時撮る映画ドキュメンタリーにいのちが残る

『立夏』

中屋保之

季節の移ろいが、以前に比べて早くなっている。更に言えば、変化の激しさには驚愕する。私たちが慣れ親しんできた「衣替え」という風習も霧消してしまいうり様の今日この頃である。

「立夏」の解説には、『春分と夏至のちょうど中間にあたる二十四節気のひとつ。まだ春の冷たい空気を感じる日もあるが、暦の上では夏の始まりにあたる日』と載っている。新緑たけなわ、緑風吹き渡る。日々がないに等しい。せめて、詩歌で季節感を味わってみたい。

初夏しよか即時そくじ

王安石おうあんせき

石梁茅屋有灣碕

石梁茅屋灣碕せきりょうぼうおくわんきあ有り

流水濺濺度兩陂

流水濺々りゅうすいせんせんとして兩陂りょうひに度わたる

晴日暖風生麥氣

晴日暖風せいじつだんぬるぼくき麥氣まきを生しじ

綠陰幽草勝花時

綠陰幽草りよくいんゆうそう花時かじに勝まさる

意は、【石の橋、茅葺の家、そしてそれらを囲うように曲がった岸辺もある。流れる水は、さらさらと両側の堤の中を渡つてゆく。初夏の良く晴れた日、暖かい風が吹きわたると、麦の香りがわき起こる。木陰にひっそりと草も茂り、花の咲く

頃よりも趣がある】 だそうである。薫風に身を委ねる心地よさが伝わる。

王安石は、北宋の政治家にして文人であるとともに思想家でもあったという。政治家としては、かなり革新的な人物であつたらしい。為に、衝突することも多く失意のうちに官を辞したという。この詩は晩年の作とのこと、煩わしい世俗と二線を画した心境であつたか、あるいは絢爛な花に囲まれた栄華に未練を残しながらの諦観を「緑陰幽草」に託したのであるうか。前者であることを願う。

二十四節気をさらに三分割した「七十二候」では、立夏の終盤を「竹筍生」と称し、筍がこの時期の旬の食材とされている。先日、筍の炊込みご飯に挑戦した。といつても、〇〇の素なる『寡夫』にとつて至極ありがたい商品を利用したまでの事。栄養豊富な筍には、疲労回復にも効果があるといわれる。この夏を乗り切るためにもう一度くらい挑戦してみようと思う。

おそるべき 君等の乳房

夏来る

緑蔭に 三人の老婆

笑へりき

西東三鬼 (二九〇〇) (明治三三) 年五月十五日岡山県津山市生まれ

『酔いの徒然』（二四六） 丸山 酔宵子

やす幸店主 敬白

『銀座老舗の閉店』

4月26日金曜日。初夏を思わせる爽やかな夕暮れ時、30年あまり通っているクラブ「パレット」の40周年パーティに向かって銀座をゆっくりほろ酔いで歩いていった。

銀座のネオンが灯り、着飾ったホステスが銀座7丁目鈴らん通りを行き交っている。「あれーっ。やす幸」の大きな看板に電気が灯いていないが、どうしたんだろう・・。」と、店の前に行ってみると、シャッターが掛かり、横には流麗な筆致の大きい張り紙が貼ってある。

お客様各位

平素は格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます。さて、突然ではございますが諸般の事情により、二〇二四年四月二五日をもちまして当店を閉店する運びとなりました。長きにわたるご支援に心より感謝申し上げます。す・・・・・

創業八三年の二代目オーナー石原さんは九〇歳を越し、流石に足腰も弱り、店には立っていないことは前から知っていた。しかし、昼間に介護も兼ねた運転手付きで店に来て、その日の「おでん出汁」のチェックに毎日来ていたことは、若手の一番弟子の奥田雄斗君から聞いていた。

先月も、一人で四時ごろから白木のカウンター席で一杯呑んできたばかりである。その時、奥田君は何も言っていなかったし、石原オーナーも相変わらず元気と言っていたのだが、突然、体調を崩したのか、大変心配なことである・・・。

流麗な 閉店知らせ 春の宵

酔宵子

白木の長いカウンター右隅のいつもの席に座って「先ずは・・・はんぺんと大根・・そして出汁と刻み葱多めで・・」。磨かれた赤銅鍋の中は美味しそうな具が品よく煮えている。

昭和八年石原さんの母親が創業し、新鮮な旬の素材を

昆布だしに塩だけで味付けし、あっさりした中にもコクのある味が評判であった。いつも座る白木のカウンター壁には、白い割烹着を着た艶っぽい母親のモノクロ写真が掲げられている。

元々、創業は銀座五丁目三笠会館の前であった。戦後の高度成長期からバブル期まで、銀座の老舗旦那や政財界の大物たちが足繫く通った店で、軽井沢にも「軽井沢やす幸」を出店して、銀座のお得意様の軽井沢別荘ライフに対応していたのである。

しかし、バブル崩壊後、銀座三笠会館前の地上げ再開発で、銀座七丁目鈴らん通りに移転したのである。

五〇数年程前、「やす幸」に初めて行ったのは、外資系広告代理店に勤めていたころ、ある大先輩放送局営業マンに紹介されたのが最初である。店内に入れば白木の一枚板のカウンターには恰幅のいい旦那たちや凛々しい紳士がずらりと並んでいる。

「このおでんはな…、特別なたれを使わず、塩と酒と新鮮な素材でつくるんだよ…」「ヤーツ、先輩！美味しいース…。いくらでも食べますね…」

白木越し おでんお替り おぼろ月

酔宵子

その時以来現在に至るまで、若気の至りで脱サラし、紆余曲折、東京も離れることもあったが、この一〇数年は必ず正月の仕事始めにはお得意様の新年挨拶の後は、必ず寄り、いつものカウンター席で、美味しいおでんと新年の一献で、新年の新たな気持ちをかみしめていた。

特に、「やす幸」の特別な新年お年賀があり、それをこの一〇数年必ず戴いて来たのである。それは、「やす幸」のロゴが入った単なる「布巾」ではあるが、実に粋で、品のある心豊にさせる年賀なのである。

三笠会館前の時代の「やす幸」の横の路地裏には創業大正12年の「関東炊き」の老舗「お多幸」があった。豆腐も大根もはんぺんもよくぞここまで煮込んだもので、黒茶色に光っている。

「お多幸」も同じ地上げで銀座8丁目に移転したのであるが、「お多幸」は、まだ頑張っている。

やす幸か いやお多幸か 酔いの春

酔宵子

風車の歌 (かざぐるまのうた)

高橋育郎

まわれ まわれ 風車

なる

まわる まわるよ 風車

おろかで無益な戦争

風に吹かれて くるくる まわる

戦争のない世界がいいな

そよ風 いいな ゆっくりまわろう

風車 平和の歌を うたっているね

風の吹くまま 身をまかせ

うれしいな 風車

ただひたすらに まわっているよ

平和を教えてください ありがとう

はむかうことなく さからうことなく

風車は 平和だね

そう はむかい さからえば 戦争に

童謡 ぼんぼこ山の タヌキどん

高橋 育郎

ぼんぼこ山の タヌキどん

ぼんぼこタヌキの 腹つづみ

まんまるお月さん 大好きだ

ぼんぼこぼんの にぎやかさ

月夜のぼんは おおはしゃぎ

東の空が 赤らむよ

みんな輪になり 腹つづみ

お手々つないで かえりましょ

ぼんぼこ山の タヌキどん

ぼんぼこ山の タヌキどん

お月見だんご 大好きで

春はナノハナ 秋ススキ

みんなそろって おいしいな

朧の月と 十五夜だ

お空のお月さん たべたかろ

ぼんぼこ山は 平和だね

絹の話 (163)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の「部屋」を作ろう

絹は明治以来高級な糸作りに官民あげて努力を重ねてきました。その反面、絹を着るとどうして気持ちが良いかなど野蚕、家蚕の比較研究はされていますが、絹のアミノ酸や多孔質などによる機能性研究は進んでいません。絹は加工の仕方で感触は千変万化し、その感触評価の幅があまりにも広いので、その事を狭義に書いたり公の場で話したりする事が暗黙に規制されています。

しかし現状に留まっただけでは絹の将来はありません。絹を兵装に使って中国を統一した秦やユーラシア大陸を制覇したモンゴル帝国を思い出すまでもなく、絹が身心の健康に役立つ事を提案してみようと思います。

絹壁の部屋は気持ちが良い

*1990年頃、東京赤坂に「コーヒー赤坂」という喫茶店がありました。壁も天井も中国の柞蚕（野蚕）の厚手の布で内装され、店内に入ると安堵感を感じる不

思議な空気、お客様と話がスムーズに運びました。また、湯上り姿の芸者衆がタバコをふかしてもあまり気になりませんでした。

*同じ頃、神戸で劇場の貴賓室を野蚕の絹壁にという特徴があり、私共がインドのぞっくりしたタサール蚕（野蚕）布を納品した所、完成後とても気持ちの良い部屋が出来た。という連絡がありました。

*湯河原の明治の元勲井上馨の別邸は現在歴史的建造物になっていますが、現在も私の友人が住んでいて、客間の壁は柞蚕絹紡糸で織られた厚手の布で内装されていて、季節を問わず穏やかな気持ちになる部屋でした。

*私共の長年のお客様で、家のカーテンをタサール蚕の生地に取り替えた所、仕事を終えて家に帰った時、リラックスした気持ちになると悦ばれました。

右記のように絹壁などの内装材にはいずれも糸の中心部分までタンニンが含まれた茶色糸の多孔質の野蚕糸（糸の中は空気が20〜25%）が使われています。

この絹は耐熱温度（250℃）が高く、燃えても有毒ガスが発生せず、緩衝性に富み、紫外線の反射吸収率が高く脱色変色の心配が少なく、食害も無く、静菌性、吸臭性、保温保湿に優れ、織度は家蚕糸の3倍近い節のあるザラツトした糸で、見た目や感触が内装材に適してい

ると思われます。

野蚕絹の部屋づくり

壁には太番手の耐熱温度(250℃)の高い野蚕布(インドのタツサーシルク又は中国の柞蚕シルク)がと良いと思います。

日中用のカーテンはシャンパンゴールドに耀くタツサーシルクの無染色精練糸の薄織物、夜間用は少し厚手の紬タイプがよいのではないのでしょうか。

絹に朝日が当たると能動的幸せホルモンのオキシトシンが分泌されて爽やかな目覚めになります。赤味を帯びた夕日になると愛情ホルモンのセロトニンが出て、しっかりとした広葉樹林の森林浴的気分になります。

昔、殿様がイライラすると小姓が絹貼りの扇子で殿を扇いだと言われていますので、大切な来客の多い家の客間の壁を絹貼にしたわけがわかります。家庭で主人のイライラを収めるにも効果を發揮するのではないのでしょうか。

毛布、シートに関しては、秋から春まではエリ蚕(野蚕)の毛布、シートが最適です。エリ蚕シルクの保湿感、蒸れなく、赤ちゃんの肌に近いしっとりさがあり、温度も人肌に沿って上がりすぎず下がりすぎず快適です。

絹は短時間で体の中心部の温度を1℃下げ手足の温度を1℃上げる補助をしますので安堵感を覚えて安眠が得られます。

夏のシーツは柞蚕の絹紡糸が良いでしょう。吸臭性、清菌性が強いので汚れず洗濯の手間が省けます。

夏掛けはタサール蚕の薄地がお勧めです。薄くてやや頼りなく思われますが、人肌に沿う様に温度湿度の管理をしてくれて、幸せホルモンに包まれて安眠に至ります。睡眠にとつて枕は大切なツールです。

絹綿入り枕は首筋から全身にジワツト染み渡る様な快感を感じます。これこそ絹の醍醐味が満喫出来る瞬間です。パジャマや下着はツルツルした物より、木綿タッチの方が寝やすいと思います。

以上の事は絹に大きな加工経費をかけずにその機能性を生かして健康維持に役に立てようとする提案です。

絹の空間をひろめよう

この様な絹空間は不特定多数の人が集まる病院などに感染予防や精神障害者施設の精神安定のためにも有効と思われれます。飲食店でも料理を美味しく味わって頂く隠し味的な利用も考えられます。

また還暦のお祝いなどのプレゼントにも良いでしょう。

「江上浩二の独り言」78 江上浩二

二者択一とは

あるTV番組でIT機器装置を使ってALS病（筋ジストロフィー症とは異なる）患者が目線でしか示すことが出来ない、自分は生きているという意志表示が出来るんだという一面と、それに対する意志表示；欧州では安楽死を選択できるんだという患者とが取り上げられて、生か死かみたいな二者択一の話かなと私は思った。しかし、はたと困った視聴者がほとんどではないかと私は察した。生死の選択が自ら出来るんだ？ 本当に、単純な二者択一というプロセスで生死をみる事が出来て良いのだから、ALS患者さんも症状が軽微な時期に、もつと考えてみることは出来ないのだろうか？

病氣と患者さん、周囲のご家族などの関係者、患者さんを受け入れている医療関係者だけの単純な世界の話に留めず、もう少し文学的な面で生きるもの、生きるべきもの、生きたいと願うとか、今はやりの多様性という視点でもいいかも知れない、等々の議論がもつと必要だろうという提案もその番組であったように記憶している。現在の「文学」は私個人的にはエンターテインメントが主流になりつつある、サスペン

スとか、x x殺人事件で犯人捜し、そのプロセスで細かなトリック作戦（列車の時刻表や乗換方法など）が話題に取り上げられるというものはや文学という言葉とは違う表記が必要と思うのだが。

右か左か、yes か no か という二者択一といってもそう簡単ではなく、ある道を右に曲がって更に進むと今度は三叉路があるかもしれない、左に曲がると道は一本であるのだが、うねったり、上り坂や下り坂がいろいろ続き、多様である。人は問いに対して、yes/noで聞かれると思考が単純になり、それにたいする反応は、はい、そうですとか、いいえ、違いますという無味乾燥になってしまう。そこで工夫を考え、問う際に具体的に数値や what/how 的にやると今の所コミュニケーションは上手くいっているプロ野球のあるチームの新監督が語っていた。その新監督は若いので自分の考えで、いかにして勝負の現場で選手のモチベーションを上げる方法として、取りあえずトライして行こうと思ったのだろう。

以前高校野球の地方チームの監督が考え出した若い高校生の育成、モチベーションの上げ方はチームという複数のプレーヤーと一試合で何人まで、何回出たり引込んだり出来るかを前提とした新しい選手管理法で全国優勝を成し遂げたという成功例を紹介したが、翌年そのチームは、都会の若い

選手だが、普段の生活から野球の練習方法まで、出来るだけ(管理はするのだが) 自主性を重んじる學校に敗れた。まだまだこのように若い成長途上の人・組織には画一な答えはないことが分かる。

左と言う言葉がなかったら、右と(右でない方)、下という言葉がなかったら、上と(上でない方)のように反対語とか対照語が、文化圏や固有言語を有する民族、国によって違っているのが当たり前でしょう。

この5月の連休の終わりに、夜のラジオ番組がテレビ番組になって再放送されていた。映像がないラジオのトークと映像それもカラフルでふんだんにあるテレビ番組でのトークは如何に異なっているのが当たり前と察したが、その番組はあくまでも元のラジオ番組に寄り添ったものであった。ラジオトークの内容は引きこもりの方(以後彼らという)が、私には元気にしているんだなど単純に思い受け入れたのだが、葉書で投稿(今の時代ネットのSNSもあるのだが、あえてゆつくりとした昭和の文通みたいな急ぐ理由もないコミュニケーション)して、自分はいじめに合っていたとか、いじめた側の人の、何であの時そんな傷つけることをしてしまったのかという自分を苛める声もあり、久しぶりに考え込んでしまった。結構似た事に同じように彼らは反応しているんだ

と感じた。

それは、普通に考えると、暖かくなって、(春は心地よい、気持ちが良い、好きだ)としてしまうが、多感な彼らは(春は、、嫌いだ) そうだ。何故春は嫌いなんだという背景を議論したり、彼らがそう感じるのかについてもっと聞きたい・教えて欲しい。もう一つ、紹介するが、ありがとうに対する言葉が、申しわけないとか、ごめんなさい、であるという。春が好き、嫌い、という二者択一。ありがとうと(申しわけない、ごめんなさい)の組み合わせは二者択一なのか、ありがとうならば、Thank you に対してno thank you と私は短絡的に考えてしまつて、「結構です」と軽く言つてしまう。番組中で、投稿されたご意見で、過集中(over concentration?) 一つの事に過度に専念する?) という私も普段聞きなれない言葉が参照されていたが、彼らが多感であり、物事を多様な感性で問い、深く考えることが出来る能力を持っている事の証であることに気づいた。引きこもりとは、決して狭い空間に留まっているのではなく、周囲の人から話しかけられたり、自ら知らない人に話掛けようとしているだけなんだ。二者択一は実は多くの選択肢から一つを選び抜くという非常に難しいプロセスと同等であることに気付いたのである。



初狩便り
(31)



花野みぷり



みどう本陣

甲州街道の下初狩宿は日本橋からちようど百キロ、ここにみどう本陣はあり、参勤交代の大名二行様を始め、旗本や幕府の要人の宿舎となった。この建物は江戸後期、一八〇〇年頃に建てられ、母屋の左手には殿様の籠を迎える「籠寄せ門」があり、誰にも会わずに室内に入れるようになっていた。上段の間、太さ二メートルの大黒柱、ちような削りの太い築など、本陣造りの趣のある美しさを伝えている。

みどう本陣のご先祖様は源氏の神職で武田信玄にも仕えていたが、武田一族が減びると天正十年に初狩の地に帰農し、初狩地域を開墾した。当主は代々にわたり村役や戸長などの役目を務めたようだ。現在は建物をも有効活用し、保存していくために、本陣内部を貸し出しており、撮影、講演会などに利用されている。また「みどう本陣見学ツアー」もあり、江戸時代の建築の品の良さ、合理性、美を感じることが出来る。

ご当代様は私たちの活動にも協力的で「笑顔の田んぼみんなの畑」の創立総会は、みどう本陣の広間を使わせていただいた。あれから六年、喜怒哀楽を繰り返しながら七回目の無農薬の米作りに挑戦している。

(写真提供 本陣跡・古民家 みどう本陣様)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2024年5月15日

新しい施術の余波

5月も半分が過ぎました

あと半月過ぎれば5月も終わり6月です

1年も半分に来たという事になります

あつという間ですね

少し前の 本田のひとり言 に

施術を大きく変えた旨を書きました

この施術の変えてから

施術の後半に差し掛かると回復が始り

意識せず眠りに落ちる患者さんが増えました

本人は寝ていることに気づいておぼろげ

施術後 眠りそうでした

意識はあるのですが などなぞおっしゃいます

いびきをかいていらっしゃる方がほとんどですが笑

眠くなる 寝る事 は身体を治すために起るのだ

とても大切ですので気にせず寝て下さい

私もその方が深く施術に集中できる

患者さんの身体も より良くなること 二石一鳥です

新しい施術に変えてから 身体のレベルが上がリ

無理がきくようになります (良くなっていますが)

ですので 35+ゆたぼん+ヨーグルト+八分 の

八分 (はちぶん) スマホ パソコンを見過ぎない

同じ姿勢をし続けない やり過ぎない 食へ過ぎない

考え過ぎない 無理し過ぎない

などなど 何事も ほどほどに 八分でいきましよう

今日も楽しんで笑いながら行きましよう

2024年5月17日
雨の中の出逢い

今週末は 気温が上がリ暑くなりそうです
水分補給をしっかりと意識していきましょう

先日 本田カイロにて施術が終わり

見送って直ぐに患者さんから電話がありました

「先生 玄関の前に 前こっ…っ？」

興奮気味の電話先の患者さん

とにかく 外に出てみる事にしました

玄関扉を少しだけ開けると

アプローチ先にその患者さんがいました

「先生 つぶれちゃうー！」

疑問に思い 扉をゆっくりあけると

そこには……！ 大きめの力エルがいました

色は濃い茶色 大きさにして15〜17センチ

久々にみたウシガエル？らしき姿でした

その患者さんは力エルが苦手らしく玄関を出た時の
衝撃は大変だったと思います

でも 次来る患者さんの事を考えて私に知らせてく
れたのです

ありがとうございました

このままでは 道に出てつぶされてしまう……

とりあえず茂みの多い所に運びました

中々の重量で 運んでいる時に私を見て鳴き初めま
した

その鳴き声は想像している力エルの鳴き声ではなく
可愛さを覚えました

元気でいてくれるかな？ と想う今日この頃です

今日も楽しんで笑いながら行きましょう

「溜まる臓器と頭の消化」

胃腸の臓器は六腑の臓腑とは中腔臓器ちゆうかうざうきでな

口から入った食べ物を

受け入れ留めてゆっくりと

消化し分類していつて

栄養 正しく取り入れて

老廃物を出すことで

元気に活動維持される

溜まる臓器は受け入れて

ゆったりする間 必要で

消化の余裕を生み出して

胃腸が停滞しなければ

栄養・気血は肉体を

養い 元気を得るばかり

消化は意識の働きの

頭の消化と連動し

物事一旦 頭に留め

思い考え 想像し

理解しわかれば腑に落ちて

頭はスッキリ 明るくなる

胃腸と頭に 色々と

膨れるほどに詰め込めば

消化不良で動きは止まり

苦しく淀んで 停滞す

現代人は飽食で

情報過剰で詰まりすぎ

溜まりて消化に苦しんでる

溜まる臓器と頭には

留めて ゆっくり消化する

時間がとても必要じゃ

ゆったり気分を落ち着かせ

ゆっくり時間と空間の

間を持ちゃ 胃腸は動き出し

頭もしっかり働くぞ

一旦止まってみるが良し



「動かす臓器と表現と」

肝の臓器は 動かす蔵ぞう

血を蔵する臓器なり

人間活動する時にゃ

肝に貯めてる血使い

身体・精神 動かして

やりたいことに向かつてく

筋を使って運動し

血を動かす 全身が

温まることで 汗かけば

スッキリ 肝臓充実し

体力・余力を生み出すぞ

自分の感じた 願望や

思いや感情 肝により

行動表現してけば

目的達成 発散し

精神感情 豊かになる

逆に 動きや表現を

抑えて留めていく様に

やりたいことをやらずして

言いたいことも言わずして

湧き出る感情抑えれば

血は停滞し 肝鬱積かんうつせき

体はりきんで 食いしばり

ストレス貯まって怒り出す

ストレス イライラ 力りきんだら

胃腸や頭は乱されて

消化も思考も不良となり

血の栄養 不足する

動かす臓器の働きは

自分の内にある事を

極力動かし 止めないで

行動・言葉で表現し

出しきりゃ 発散落ち着いて

頭も体も 軽くなる

内に溜めずに出すが良い



岩手吟行 いわてぎんこう

其の一 そいち

殿山木風

奥州の客路 おうしゅうきやくろ 晴空に満ち せいくうみ

平野遠山 へいやえんざん 春影の中 しゆんえいうち

宿志五年 しゆくしごねん 俊傑を尋ぬ しゆんけつたず

清館に献吟して せいかんけんぎんして 喜び窮まり無し よろこきわまりなし

〔語釈〕 ○岩手吟行：令和六年四月二十一日から八十六名で二泊三日の旅。 ○春影：春の光り。 ○宿志：以前からの思い。 ○清館：後藤新平記念館。

〔通釈〕 岩手への吟行会はよく晴れて平野や、遠くに見える山々は春の光に満ちていた。

後藤新平を尋ねると云う五年がかりの思いを実行に移したのだった。私は自作の詩「讀『小説・後藤新平』於人邂逅有感」を献吟して大満足であった。

岩手吟行（其一） 令和六年四月二十二日朝

奥州客路満晴空 平野遠山春影中

宿志五年尋俊傑 献吟清館喜無窮

※ 後藤新平を小説で詳しく知ったのは丁度コロナが発生した令和二年の三月だった。後藤新平の事績に触れ、彼だったらどの様に事に当たっただろうかと云う思いが強くなり起こった。「何をやるとるか！」と怒声を浴びせるだろうなど想像して同年に拙詩を試みた。岩手教場も発足しコロナも心配なく、いよいよ皆と連れだつて後藤新平に会いにゆくぞと云う思いは結実した。

記念館では説明する人も聞く人も真剣だった。私は去り際に今回の為に用意した自作の絶句を吟じた。会員と吟行会として訪れ、目的を達して大満足であった。また旅中天気にも恵まれた事は本当に有難かった。

春風や英傑のうた吟じたり

三河アララギ発祥

今泉 由利

明治三十六年、柳本城西氏により、豊橋短歌会が始められた。

柳本氏が日露戦争に従軍されることにより、短歌会を続けることが出来なくなり、明治四十年には、亡くなられてしまわれた。

大正八年、当時、今泉忠男（ペンネーム御津磯夫）が、在学して居りました豊中（時習館高校の前身）に、国語の新井本治先生が、東京から赴任され、初版の「赤光」を示されました。この先生の御指導が、三河アララギへの大粒の種となり、「これでも短歌なのか」と、その強烈な生命力には中学生（旧）ながらの驚異でした。新井先生は、アララギの同人ともいうべき人で、第一巻（大正七年）からの毎月半頁つづの短歌が、三河アララギへのはじまりでした。

昭和七年九月十八日、午後二時から、豊橋の佐藤氏宅で、

創立歌会が開かれ、当日、十一名が集い、そして二回目が開かれ、以後この時に、「三河アララギ」というタイトルになりました。以後、永久に伝えてゆかなければならないこと、と承知しました。

昭和十二年七月七日、日支事変の始まった日に、万葉の里、御津町御馬の今泉忠男（ペンネーム御津磯夫）宅で歌会を開き、アララギの歌会報を載せ、大東亜戦の戦況：只ならぬ時まで毎月つづけられました。毎月々、なるべく満月の月夜を選んで、歌会が開かれるのでした。大恩、寺山上の観月歌会、御畑歌会、土屋文明先生の御来を得ての大会、豊橋にてアララギ誌を印刷する準備、今泉忠男の応召…。

時は来て、昭和二十一年には、あらたに歌会を開くことが出来、美しい歌会がつづけられました。この会を「三河アララギ」として守り育て、三河アララギ会誌発刊となりました。「三河アララギ」の未来を信じました。

軍医として、戦争に行った父、今泉忠男、御津磯夫は

戦場からも、やっと歩ける程の今泉由利に、短歌絵葉書が届きました。それが何だか理解も出来ない小さな私でしたが、父が戦争から帰ってきた日がありました。三河アララギ短歌誌が、貴いものだと、知っていました。父母、なきあとは、私が守ります。

この度、三河アララギ誌の印刷をして下さっている、桜創美様に、お手伝いいただき、三河アララギ創刊より現在までの全冊をととのえ、国立国会図書館様、岩手県北上市本石町二丁目5―60 日本現代詩歌文学館様に、三河アララギ誌創刊より今日に至る全冊を、収納させていただきますました。

三河アララギ誌に、お届けいただいている皆様の作品が、永久に、安全に、残されます。また、心して三河アララギ誌を続けさせていただきます。

道後温泉本館全館営業再開・改築一三〇周年記念

第42回 子規顕彰全国短歌大会

応募方法

雑詠2首1組 1,500円
何組でも可。(未発表作品に限る)

作品募集

規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロード(A4版)できます。

必要事項を楷書で明記し、応募料を添えてご応募ください。郵送の場合は郵便小為替か現金書留。直接持参も可。

締切 令和6年7月31日(水) 当日消印有効

選者 秋葉四郎 坂井修一 中川佐和子

吉川宏志 片上雅仁

※順不同・敬称略

賞と発表

文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞
後援賞 現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞

短歌研究社賞・角川『短歌』編集部賞・現代短歌社賞
選者賞 各選者 特選3首・秀逸5首・入選15首

※大会当日に発表、表紙

入賞歌集 応募者全員に1人1冊送付します。(12月未予定)

表彰式 令和6年10月27日(日) 午前10時より

会場 松山市立子規記念博物館 4階講堂

記念講演 講師 坂井修一氏 (現代歌人協会副理事長)

演題 「子規と貫之―訣別、そしてこれから―」

応募先 〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1-30

子規記念博物館内 子規顕彰全国短歌大会 係

電話 089-931-5566

ホームページ <https://shiki-museum.com>

主催 松山市教育委員会

後援 文化庁・愛媛県 現代歌人協会 日本歌人クラブ 松山歌人会
短歌研究社 角川『短歌』 現代短歌社 朝日新聞社 読売新聞社
毎日新聞社 愛媛新聞社 NHK松山放送局 南海放送 テレビ愛媛

あいテレビ 愛媛朝日テレビ FM愛媛 愛媛CAV

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フォーレストビルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

◇三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利